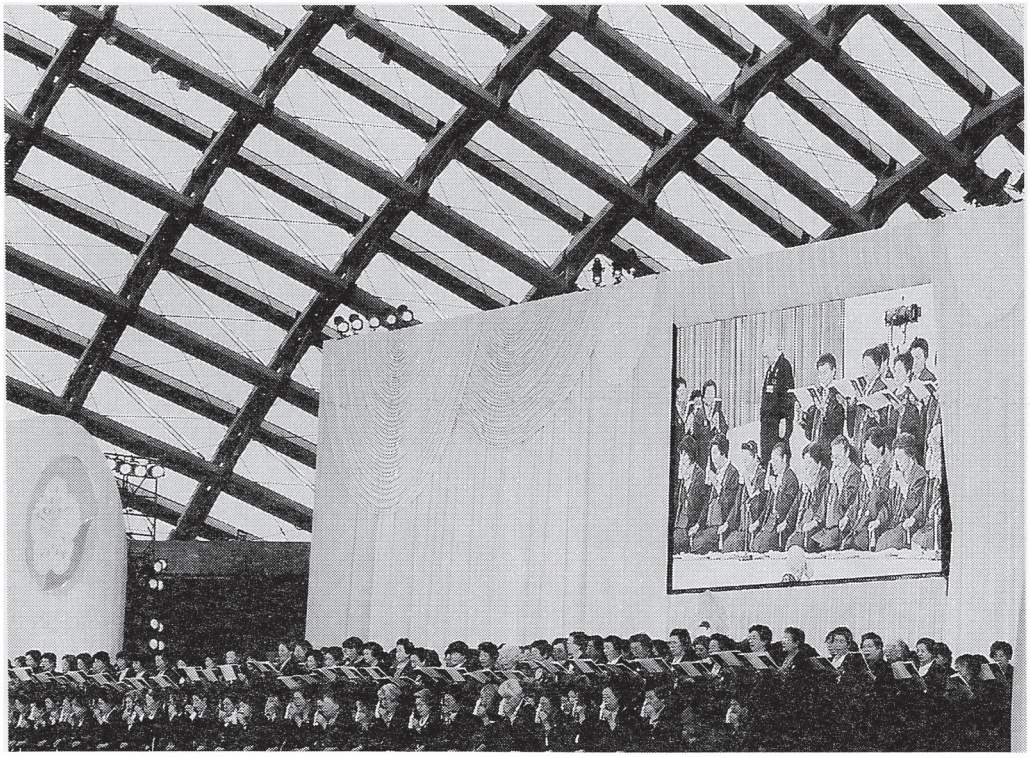
平成１５年度梅花流全国奉詠大会

秋田県会場「大館樹海ドーム」開催



《特集》
全国梅花流奉詠大会
秋田大会大成功！！

同じ

平成１５年８月１０日
第　２１号
発行　梅花流師範・詠範の会
会　長　柴　田　弘　一
題字　初代会長・故加藤信三師

梅花流師範・詠範の会事務局
五城目町　待月院　嶋森憲雄
電話（0188-52-9566）

無事円成！　えがったえがったー！

秋田県梅花流師範・詠範の会　会長
秋田市　東泉寺住職　柴　田　弘　一

「全国大会を秋田で開催しよう！」を掲げてから五年目。宗務庁詠道課と企画会社、そして宗務所の近藤梅花主事さんのもと、積み重ね練った計画と、大会関係者の協力体制を整えて迎えた大会当日は、天も加担して絶好の大会日和となりました。

大会が終ってほどなく、京都から参加された講員さんからこんなお便りが届きました。

「秋田までは遠かったけれど、会場に着いたとき、その大きさと中の広さにびっくりいたしました。会場内は木の香がただよい、冷房かと思いましたら自然の風が吹き抜けていて、私達の気持ちをなごませ、ユッタリとした気分にさせてくれました。―中略―

練習した曲もノビノビと奉詠できた感じがいたします。参加できてほんとに好かったと思います。梅花をやっていたおかげと心から幸せを感じております。

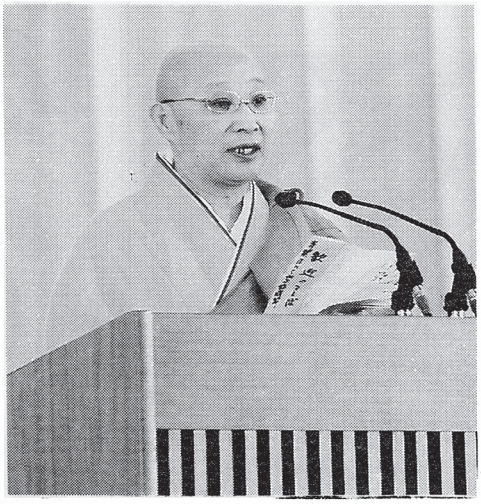
清興の『心のハーモニー』は心に強く残りました。すばらしい感動をありがとうございました。みんなみんなすばらしかった思い出の大会でした。ありがとうございました。」とありました。

全国各地から一万五千人あまりの講員さんを迎えての二日間。大きな事故もなく、盛会の裡に大円成いたしました。

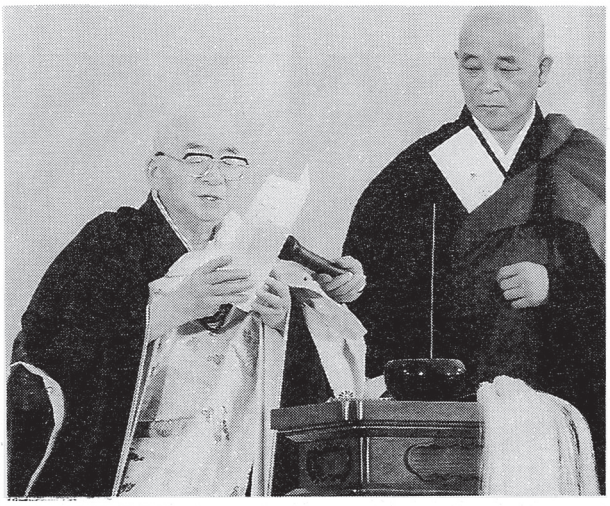
参加された方々、大会関係者の皆様、ほんとにご苦労さまでした。まづは、えがったえがったー！

あふれるほほえみと

秋田県大館市「樹海ドーム」



秋田県宗務所所長　伊藤道嗣老師



曹洞宗管長　大道晃仙禅師

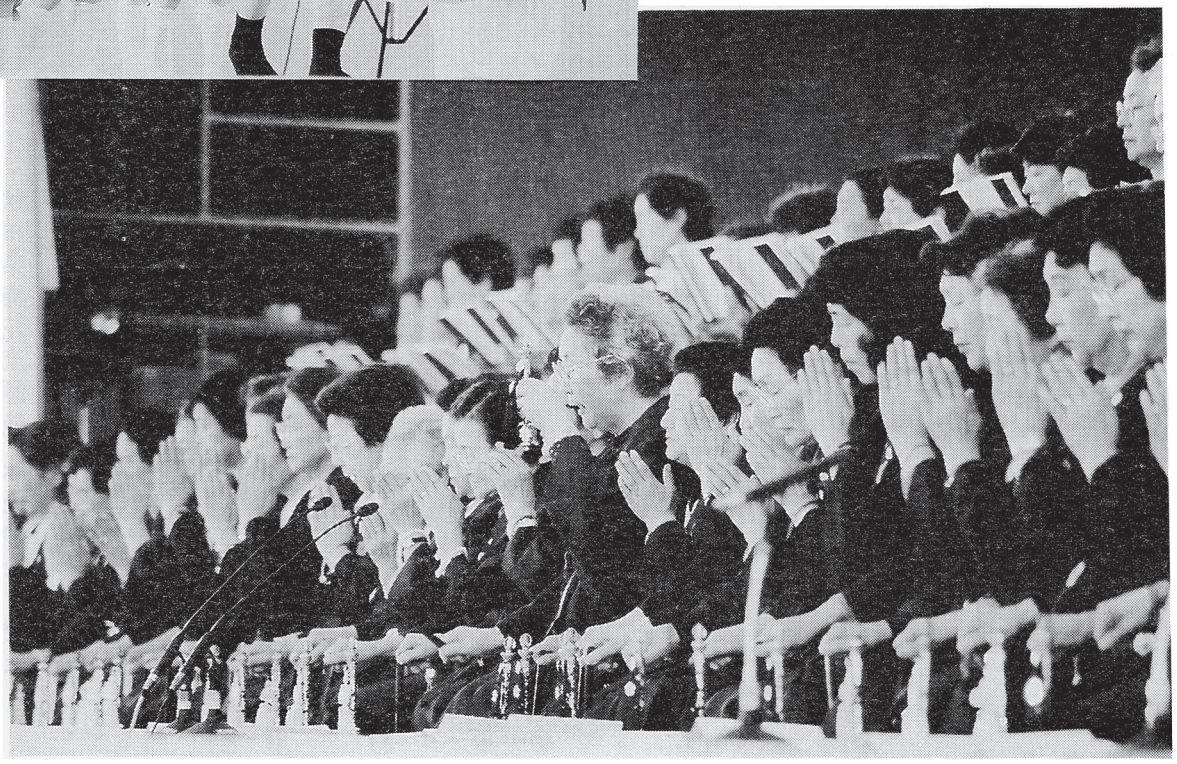
朝八時四十分、大型バスが到着。バスから降りてきた人々が大きな声で「アー、緑と水」とすごく喜んでくれました。

私は毎年全国大会に参加させていただいています。顔見知りの人達ともたくさん逢いました。いろいろとお話しました。

「秋田はずいぶんと暑いね」と言われました。「今日は特別。でもこの天気でいい秋田こまちが出来るのよ」と言ったら、「空気も良いね」とほめてくれました。

心のハーモニーが始まると、すばらしいと声を上げて起ち上がって見ていました。今後も続けてほしいと思います。

秋田県　龍渕寺梅花講講員



緊張の秋田県登壇　奉詠は『同行御和讃』

ともにあゆもう

平成１５年５月２８日／２９日

一人ひとりの参加者へ記念品の曲げわっぱ。秋田杉の木目の美しさの中に梅花の紋章がまたきれい。思わず微笑んでしまった。そしてオリジナルなバッジ。関係者の心配りに感謝する。

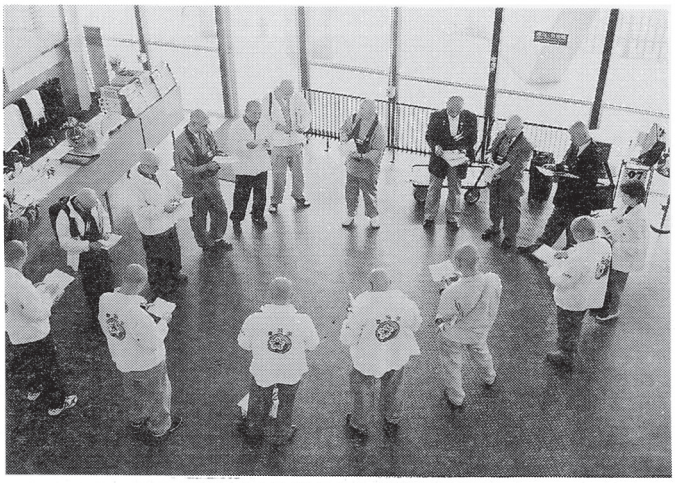
参集者の入退場の指導の適切で、スムーズに運営されたことに感服する。特に退場の際に地元の民謡でみんなが盛り上がったことは忘れられない。

秋田県　松庵寺梅花講講員

喝采をあびた清興『心のハーモニー』

おつかれさまでした

関係スタッフ約２００人・打ちあわせ回数のべ２０数回・秋田県梅花講始まって以来最大の梅花行事でした



スタッフの打ち合わせは念入りに

初夏の樹海ドームが全国の講員を迎える

清興「心のハーモニー」も練習を重ねた

曹洞宗宗務庁で本庁職員・企画会社と打合わせ

みなさんとても親切で、ありがたかったです。
秋田県　大蔵寺講員

“ほっと”しました

宗務所梅花主事　近藤俊貞

五月二十八日、快晴。早朝より続々とバスが到着。全国からの参加者が、巨大な「大館樹海ドーム」へ吸い込まれてゆく。七八〇〇席用意したドーム内の椅子が次々と埋まっていく様子を目にし、午前九時五十五分の大梵鐘第一声を耳にした時、「いよいよ始まったな」と身が引きしまり、目頭が熱くなりました。

昨年の武道館「梅花流創立五十周年記念大会」後、秋田大会に向けて準備委員会を結成し、二十数回の会議を重ねてきました。「準備が整えば行事は終ったも同然」と言われるごとく、五月二十八日～二十九日の二日間は、アッという間に過ぎた感があります。

五十一年目にして、秋田県で開催された「梅花流全国奉詠大会」。二十六日夕方の地震で足下から崩されそうになりましたが、大会役員、関係者大勢のご協力を得て、無事、大盛会にて円成出来ましたこと、「ほっと」しております。

特に今回は清興で「心のハーモニー」を行なうことになりましたが、尺八、お箏の先生方、烏合衆の面々にはご難儀をおかけしましたが、おかげさまで多くの方々から「たいへんすばらしかった」と大喝采をいただきました。秋田県ならではの清興だったと思います。

本大会のため、ご協賛・ご協力くだされました皆様に対しまして、衷心よりお礼申し上げます。

梅花 ちょっとぶじょほう つれづれ

キッカケ

井川町　乗江院副住職　佐藤晃心

梅花流全国奉詠大会が大館樹海ドームを会場に、全国各地より一万五千人の講員の皆さんの参加をいただき盛大に開催されました。初めての秋田県での全国奉詠大会とのこと。何をどうすればいいのやら不安だらけでした。なにせ県の奉詠大会に一度だけ自坊の乗江院梅花講の講員さんの登壇を見学しただけの知識しかなかったわけですから……。それでも役員の一人としてお手伝いできればと会場入りしてみれば、巨大スクリーンにでっかいスピーカー。いすイス椅子なんじゃこりゃ??壇上の本尊さんちっちぇ～くてみえね～。ドームへ来たのも初めてでしたが、県の奉詠大会の記憶とまるで違う目の前の光景にただただ圧倒されてしまいました。

そもそも私が梅花流詠讃歌と深く関わり始めたのはここ二年ぐらいのこと。梅花流師範養成所へ“いく、いけ、いこう”がキーワードでした。冬の一泊研修会?（梅花ではありません）で、私の学生時代からの法友（他県宗務所）がどうも今期入所するらしいとの情報が流れてきたことで、共通の知人であるM沢さん、すでに養成所を終了していたM田さんらの助言が（どうしてもやれと言わんばかりの熱弁で、何となくやらなきゃならんのかなぁと思っていた自分をいいようにノせられてしまった?）梅花流師範養成所への出発点になりました。後で聞いたことですが私の性格をよく知っている法友が、直接自分で誘っても断られるのでまわりから言って誘ってくれという連絡網だったみたいです。でも養成所へ行ったら彼は居ませんでした。直前で選考にもれたそうです。

もともと梅花講があり、母親が主に取り組んでいた訳で、よく検定前か何かで練習しているわきを通ると『梅花やれ～梅花やれ～』と口酸っぱくいわれたものでした。キッカケはどうあれ梅花に関わる事に喜んでくれたのですが、私が養成所を終える前に母は涅槃へ旅出ってしまい、急きょ乗江院梅花講に関することは全て引き継ぐことになりました。が、いままでどういう風にやってきたのか講員さん達に聞きながら手探り状態からのスタートなのに、手始めの行事が全国奉詠大会と、梅花に関して私の周りすべて最初から全国奉詠大会がついてまわったような気がします。講員さん達は壇上で、私は会場内でそれぞれの全国大会でしたが無事に終えることが出来てほっとしております。関係スタッフの皆様お疲れ様でした。

自分自身経験不足、お唱え不足ながらも師範の方々、法友、法縁の皆さんの助力を得てどうにかこうにか講員さんの前でお唱えしております。指導者としてまだまだ課題は山積みですが、一歩一歩前進あるのみ。これからも一緒にお唱えする事のかなわなかった母の法具と共に、同行同修、学んでいきたいと思っています。ご指導宜しくお願い致します。

◇テレホン梅花◇

☎〇一八-八七三-七六七六

八月　二日　戦災精霊御和讃
　　九日　盂蘭盆会御和讃
　　一六日　迎火
　　二三日　澄心
　　三〇日　追弔御和讃
九月　六日　開山忌御和讃
　　一三日　真清水
　　二〇日　香華
　　二七日　紫雲（太祖）
一〇月　四日　達磨大師御和讃
　　一一日　総持寺二祖讃仰
　　一八日　永光（総持二祖）
　　二五日　伝光
一一月　一日　誓願御和讃
　　八日　正法御和讃
　　一五日　太祖誕生御和讃
　　二二日　梅花（太祖一番）
　　二九日　菩提（太祖）
一二月　六日　明星
　　一三日　高嶺
　　二〇日　同行御和讃
　　二七日　道交

※ご意見、ご感想をお寄せ下さい。
010-0111 秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺（〇一八-八七三-二六七五）

絵図でつづる

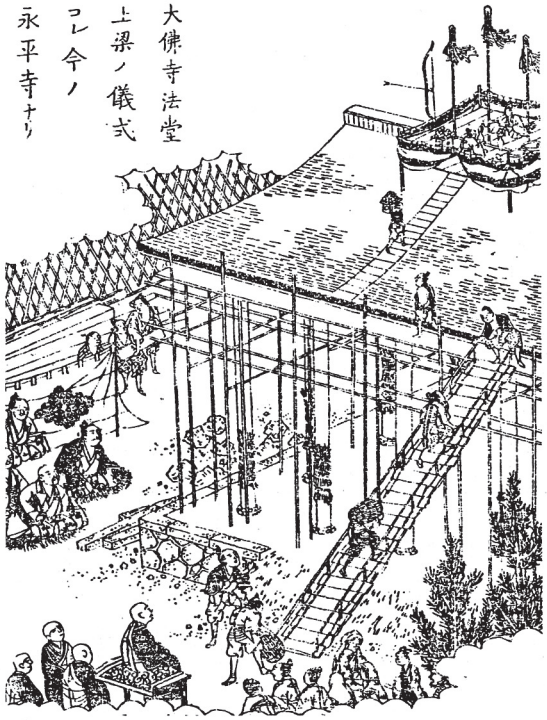
道元禅師ものがたり（4）

10 宣言

したたるような森の緑と清冽な山の空気。道元さま一行が越前志比庄（しひしょう）に着いたのは七月の末のことでした。はじめは吉峰寺（よしみねでら）という古刹に住まわれ、翌年の寛元元年（一二四三）、峰づたいの地に新たな堂宇を建立することになりました。「大いなる仏達の集うところ」すなわち「大仏寺」というのがそのお寺の最初の名前でした。越前に移られてからの道元さまは、さながら水を得た龍のようにたいへん活気にあふれ、京都の興聖寺時代にも増して、修道と著作活動に打ち込まれました。

やがて三年後の寛元四年（一二四六）、道元さまはお寺の名前を「永平寺」と改められました。「永平」とは中国に最初に仏教が伝えられた、後漢時代の年号の名前です。すでに日本には真言・天台をはじめ多くの仏教宗派が伝えられてはいたのですが、ここを拠点として、初めてこの国に本当の仏教を弘めていこうという決意を、永平寺という寺号に込められたのです。この時の道元さまの語録には、次のような言葉が伝えられています。

「天は道が存することによって高く澄み、地は道があることによって厚くやわらかであり、人は道があることによって安らかで穏やかである。それゆえに釈尊は、お生まれになると天地を指さして《天上天下唯我独尊》と宣言された。そこで私もこう言おう、《天上天下、ここが永平である》と」。それは高らかな正法弘通開始の宣言でありました。



11 愛山

道元さまは、永平寺の修行環境をことのほか大切にされました。ある時、弟子達に向かってお言葉を述べられました。「仏道を学ぶには、道を求める心が一番大事である。ここ永平寺は、山が人里離れ谷も奥深くてたやすくたどりつけない。ここまで来るには海を渡ったり、山をよじ登ったりしなければならない。道を求める心が切実でなければ、至ることの出来ないところである。谷川は昼夜音を立てて流れ、山は春秋美しく、水や柴を運ぶにもたいへん好いところである」と。

菊花をおひとくちメモ

☆春は花☆

春は花　夏ホトトギス　秋は月
冬雪さえてすずしかりけり

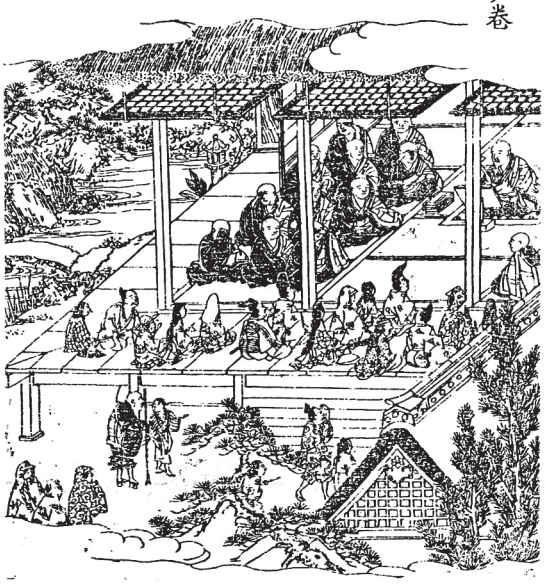
この和歌は古くから道元さまの作として、「本来の面目」という詠題とともに曹洞宗に伝えられてきました。四季折々の情景のひとつひとつが、みな本当の姿であるということを詠まれたものです。京の都での暮らしと違い、山深い越前の地は、森の緑、清流の響き、天河に浮ぶ月、冬の冷気等、季節の移ろいがいっそうくっきりと感じられたことでしょう。そんな山中での修行生活を道元さまはこよなく愛されました。峰の色も渓の響きもすべて釈尊の声と姿・・そんな思いもこうしたお心から生まれたのでしょう。

川端康成がノーベル文学賞受賞の記念スピーチ「美しい日本の私」の中で、この歌を紹介したことにより、世界の人々に広く道元さまのお歌が知られるきっかけとなりました。

☆死別をくいかえして☆

道元さまの教えは、多くの仏教者の中でも純粋さを求める姿勢においてたいへんきびしく、哲学的にも非常に高い識見を持っていることで有名です。しかしその一方で、道元さまの生涯は悲しい死別の経験に彩られていました。幼年期のご両親とのお別れ、宋国へ同行しながら帰ら

一度だけ、道元さまは信者の懇請を断りかね、永平寺を離れ、時の権力者北条氏のために鎌倉へ説法に赴いたことがありました。鎌倉での応対がどのようなものだったのか詳しく伝えられてはいませんが、都や権力者に近づくことを誰よりも嫌っていた道元さまにとって、それは苦渋に満ちたことであったようです。永平寺に帰った道元さまは、ほっとしたように弟子達に打ちあけるのでした。「今日、山に帰れば雲が喜んで迎えてくれる。私の山を愛する気持ちは以前よりもいっそう強くなった」

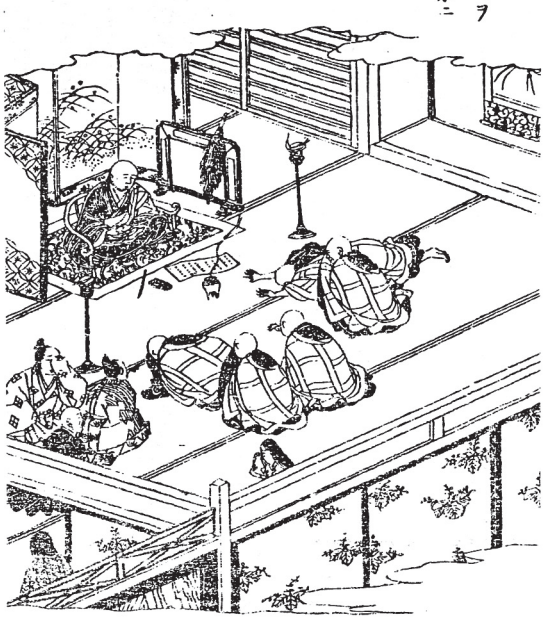


12 不滅

建長五年（一二五三）正月、五十二歳の道元さまは、いつものように『正法眼蔵』の講義を弟子達に向かってなされました。けれどもその時は、その頃までに次第に重くなっていたご病気のおからだをおしてのご講義でした。しかも内容は釈尊最期の遺誡として知られる『遺教経』のお話。道元さまはご自身の余命いくばくもないことを悟られ、最期のお説法を、釈尊臨終の教えに託されたのです。道元さまの覚悟を知って、泣きながら講義を聞く弟子達に『遺教経』の結びの言葉は、悲しく響くのでした。「弟子達よ、もう何かしようとすることをやめなさい。またもの言うこともやめなさい。時はまさしく過ぎようとしている。私は死に向かってゆこう。これが私の最期の教えなのだ」と。

やがて治療のゆきとどかぬ永平寺から、京都の篤信者の居宅に移り、手厚い看護を受けつつも、ついにこの年の九月二十八日（陽暦）の夜、数人の弟子と信者に見守られながら、道元さまは化を遷されました。

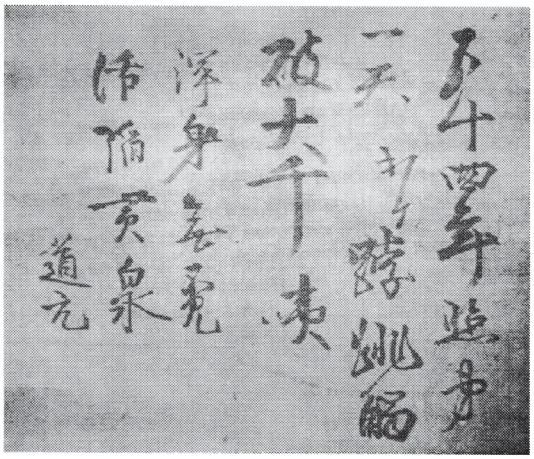
以来七百五十余年、道元さまの教えを慕う人々は今日も増え続けています。道元さまの正しいみ教えを不滅のものと承け継いでゆくのが、その教えを慕う私達に課せられた大切な仕事です。どんなにささやかでもこれに応えてゆくことが報恩の道となるでしょう。（了）



ぬ人となった建仁寺の明全和尚。生涯の本師と仰いだ如浄禅師。そして多くの弟子達の中でもっとも期待していた僧海という若年僧侶の夭折。みな、独身の道元さまがご自身のよりどころとしていた人びとでした。「世の中は何にたとえん水鳥の嘴ふる露に宿る月影」。無常と題されたこのご詠歌には、大切な人々の死を看取ってきた道元さまの深い感慨がにじんでいるようです。

☆遺偈☆

いよいよ命終の時をさとった道元さまは、弟子に命じて筆を用意させ、辞世の偈をしたためました。



五十四年、第一天を照らす。
箇の踔跳を打し、大千を触破す。咦。
渾身覓るなし、活きながら黄泉に陥つ。

道元

もっと梅花がスキになるっ！

梅花流講員一泊研修会

県北地区

期日　10月21（火）～22日（水）

会場　北秋田郡合川町・正法院

県南地区

期日　10月28（火）～29日（水）

会場　岩城町・厚生年金休暇センター

対象　県内梅花流檀信徒講員

参加者の習熟度に合わせた分科会形式が基本です。寺院で行われる勤行や講話、なごやかな懇談等々、一泊二日のたっぷりした時間だからこそできるいろんなメニューを用意してみなさんをお待ちしています。

※詳細な日程・経費・申込先については後日、各講長を通じてご連絡します。まずは概要のお知らせまで。

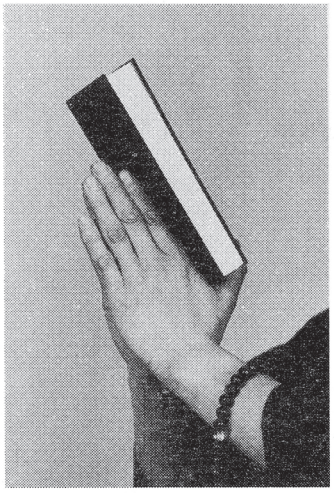
写真で見る基本作法

（その８）鈴鉦を用いない奉詠

大会の登壇奉詠の時のように、鈴鉦を用いないで奉詠する場合は、合掌奉詠が基本となります。

ただし、教典のみ持って奉詠する場合は、その曲により二（四また六）ページ開きとし、親指と小指を内側に、ほか三指を外側にして持ちます（持ちにくい場合はこの限りではありません）。

また教典を奉持する場合は、合掌した両親指と両人さし指の間に、タテにしてはさみ持ちます。



梅花流宗務所検定会日程

九月三日（水）二ツ井ヘルスセンター
対　象　第九・十教区
事務局　九教区・盛澤寺　富岳正純

九月九日（火）大館市・北秋くらぶ
対　象　第十一・十八教区
事務局　十八教区・龍泉寺　佐藤俊晃

九月九日（火）本荘市・恵林寺
対　象　県南各教区
事務局　三教区・東林寺　佐藤道昭

十月七日（火）秋田市・さとみ温泉
対　象　中央地区・三級教範
事務局　秋田県宗務所

受検希望者は各講長を通じて、検定日二週間前までに事務局へお届け下さい

禅センター・梅花講習日程

【宗侶・寺族研修会】

十　月十四日（火）十時半～十五時半
講師　柳川浩二師範
課題　作法・高嶺・他

十一月十七日（月）十時半～十五時半
講師　山中律雄師範
課題　作法・成道御和讃・明星

二　月十七日（火）十時半～十五時半
講師　本間俊英師範
課題　作法・涅槃・不滅

【檀信徒講習会】

九　月十二日（金）十時半～十五時
講師　亀谷隆道師範　柿崎隆穏師範
課題　達磨大師御和讃・他

十　月　十日（金）十時半～十五時
講師　伊藤道人師範　森澤宜彰師範
課題　追善供養御和讃・他

十一月十四日（金）十時半～十五時
講師　柿崎隆穏師範　佐藤俊晃師範
課題　慈念・他

十二月十二日（金）十時半～十五時
講師　浅田高明師範　小野碩瑛師範
課題　伝心・他

二　月十三日（金）十時半～十五時
講師　三浦賢翁師範　小野碩瑛師範
課題　涅槃御和讃・他

三　月十二日（金）十時半～十五時
講師　亀谷隆道師範　森田英俊師範
課題　報恩供養御和讃・澄心

会場はいずれも曹洞宗秋田県宗務所・禅センター（秋田市泉三嶽根十五～十八）

講員は昼食を各自御持参下さい。

受講料は無料。申込は不要です。

［宗務所でんわ］〇一八―八六八―六八七一